馬に乗って花を見る

白水百合子

日本語教師、相良あかりは、失踪したベトナム人留学生の裁判に呼ばれる。教え子でもあった、その学生の家族関係は複雑だった。留学生を取り巻く現状に翻弄されながらも、あかりは、自分の生き方を模索する。

私は群馬地方裁判所に来ていた。

まさに、今から日本語学校での教え子、トラン・ゴック・チャムの公開裁判が始まろうとしていた。

傍聴席には誰も居ない。私に連絡をくれた、国選弁護人であろう女性が、並列された右手の机に腰かけていた。中央に検察官らしき人、その横には担当官と通訳と思われる人たちが座っていた。

横の扉が開いて、両手首を腰縄で結わえられたチャムが入ってきた。白い長そでのTシャツに黒のジャージ姿で、前髪は顔の半分が隠れるほど伸びている。学校の寮から失踪し、約半年が経っている。私の顔を見つけると、始めはびっくりした様子だったが、次第に目に涙が盛り上がり、泣き顔に変わった。審問台に促されるのだが、後ろに座っている私の方に何度も顔を向ける。「ごめんなさい、せんせい、ごめんなさい」、口の動きがそう言っていると分かり、私も思わず感情が込みあげる。これが同情の気持ちなのか、怒りの気持ちなのかは、私にもよく分からない。

冒頭陳述が始まる。いけない、メモの準備を忘れていた。森田刑事からは、くれぐれも冒頭陳述を聞き洩らさないようアドバイスされていた。傍聴にあたって、録音はできないが、メモを取ることができると。私は一言も聞き逃すま

い、と担当官から発せられる言葉に耳を傾けた。

「二〇一九年六月七日、木曜日、只今から審議を始めます。被告人トラン・ゴック・チャム。二〇〇〇年五月十八日生まれ、十九歳。住所はベトナム国ハイズオン省チーリン県ハイフォン三二番地。二〇一八年一月に祖父の強い勧めで日本留学を決意。二〇一八年十月、福岡国際日本語学校に入学。当初は真面目に出席していたが、十二月末に群馬県に移動。兼ねてより祖父からその時期に移動するよう言い渡されていたとのこと。十二月二十六日、群馬県に移動したチャムは、祖父から指示された住所に行きつき、そこで大麻製造に関わる。二〇一九年四月二十二日、群馬県警の一斉捜査にて、大麻製造実行犯を含む十二名が身柄を拘束される。トラン・ゴック・チャムは、主に末端作業、大麻苗の水やりに従事していたとみられる。大麻苗の証拠確認を含め、ここに審議するものである」

一気に陳述されたその内容を元に、私はメモに「祖父の指示」と書いた。私の中で、少し安堵の気持ちが持ち上がる。少なくとも、入国してからの原因ではなかったことが判明したからである。

チャムが学校の寮から居なくなっていることが分かったのは二〇一九年、年始めのことだった。チャムのルームメイトが年末からチャムが戻ってきていないことを学校に告げ、発覚した。日本語学校で一番恐れることは、留学生の「失踪」である。出入国管理法の中に、「適正校、三％の基準」という項目がある。これは、日本語学校において、三％の失踪者を出したら、適正校を取り消すというものである。これは、なかなかの数字で、留学生百人のうち、三人の失踪者が出たとしたら、もうアウトである。

日本語学校の教師は、日本語を教えることも勿論重要だが、留学生が失踪しないよう、生活管理や精神管理をすることが重要案件としてのしかかる。この法の背景には、ひと昔前に、「出稼ぎ留学生」として失踪する留学生が後を絶たなかったことがあげられる。しかし、最近では、日本語学校でも充分な経費支弁ができる家庭の留学生を確保することができてきており、事実、当校ではこういった問題は殆ど起きなくなっている。そもそも日本語学校とは、留学生の人生の夢を叶える最初の砦である。この砦で留学生たちは日本語と日本生活のイロハを学ぶ。日本語学校の質がその後の留学生の人生を左右すると言っても過言ではない。日本語教師になって八年目、教務主任に任命されて三年目、少しは留学生教育に自信ができてきた矢先の事件だっただけに、私はとても残念でならなかった。

裁判が終了すると、チャムは、入ってきたドアに引き戻されていく。再度、私の顔を見ていたが、最後はうなだれ

るようにして出て行った。しばらく、私は傍聴席から動けないでいた。

「福岡国際日本語学校の相良あかり先生ですね？」

振り向くと、先ほど見かけた国選弁護人が横に立っていた。私は慌てて立ち上がる。

「改めまして、チャム君の国選弁護人、飯島涼子と申します」

差し出された名刺には群馬県の弁護士事務所の名前が書かれていた。受け取ってから、自分も慌ててバッグから名刺入れを取り出した。

「このたびは、チャムがお世話になります。福岡国際日本語学校の相良あかりです。本来であれば学則に従い、チャムは退学となります。しかし、留学ビザを出したのが当校である以上、事件を見届けるよう、理事長より申し付かって参りました」

私がそう挨拶すると、待っていたように飯島弁護士は用意していた書類を出してきた。

「早速ですが、この書類に著名捺印を頂き、返送して頂けませんでしょうか？」

そう差し出された書類には『嘆願書』と書かれていた。

「チャム君はまだ未成年ですので、罪を軽くしたいと思います。そこで、学校からチャム君に対する嘆願をして頂きたいのです」

ハキハキとした言葉遣いに少々圧倒されながらも、私は、「……はい、分かりました。では、持ち帰って、理事長に相談致します」と答え、書類を受け取った。書類をバッグに入れつつ、これからのチャムのことを聞こう、と顔を上げると、もう弁護士は踵を返し、ドアの方に歩いていった。「それでは」とか「ではこれで」という言葉さえも無かった。裁判も初めてなら、弁護士を前にしたのも初めてである。裁判の前に飯島弁護士とは、電話で一度、メールで二回ほどのやりとりはしたのだが、無駄のない会話、無駄のない文章が印象に残っている。昔から医者と弁護士は偉い人、と思い込んでいる私は、明らかに気おくれしてしまい、呼び止める勇気も出なかった。

群馬から戻った次の日は、一限から授業に追われ、慌ただしく時間が過ぎて行った。理事長に事件の報告や嘆願書の件を報告しなければならないと思いつつも、理事長が不在であったことも重なり、報告は一日延びることになった。同僚たちも裁判のことは聞きたいが、目の前の授業や学生指導に追われている。私も他の業務が重なり、なかなか同僚たちと話をする時間もない。それに、チャムの件は、いわば終わったことでもある。教師たちにとっては、目の前

の留学生管理が最重要課題なのである。そしてその日は、放課後に主任学生面談が入っていた。問題がある学生は、殆ど担任が対処するのだが、担任が処理できない場合は主任面談になる。主任とはいってもそれほどの権威はない。日本語教師界での序列は、他の教育機関とは少々異なる。日本語教師資格とは国家資格ではないので、比較的取得しやすい。主婦のパートとしては最適だが、専任は留学生管理や進学指導がのしかかり、その業務は膨大だ。更に教務主任ともなると、その雑務管理の多さに、誰しもが躊躇する。私は、優柔不断さがある自分を変えたく、三年前に自ら志願した。どちらかと言えば、実績のある先生方の後ろで雑務に走り廻る役目、という方が当てはまる。

主任面談の学生の名前を見て、ため息が出そうになる。王紅花（オウホンファ）。今年二十一歳になる、中国からの留学生である。とても優秀な学生で、勉強面では全く問題はないが、プライドが高く、そのキツイ性格に、教師たちはたびたび彼女を敬遠してしまうのだ。今回、紅花のアルバイト先について問題がある、との申し送りである。通常、留学生は週に二十八時間のアルバイトをすることができるが、風俗店でのアルバイトは禁止されている。紅花のアルバイト先が風俗に触れているかもしれない、ということで主任面談になったのである。

放課後、どう切り出そうかと悩みながら面談室に向かう。

「先生、何の用ですか？」

すでに面談室に入っていた紅花が目を吊り上げている。

「紅花さん。久々に、あなたと話したいと思って呼んだのよ。どう？　大学入試の準備は進んでる？」

「まわりくどい言い方は辞めてください。私のアルバイトについて誰かチクったんでしょう？　誰ですか？」

「まあ、そんなに怒らないで話をしましょう」

「先生って、本当に日本人的ですよね。最初に優しい言葉をかければうまくいく、と思っているでしょう？　日本人っていつもそうですよね。本音は違うのに、さも寄り添うような言い方をする。そういうやり方はずるいと思います。私はそんな先生の話し方、大嫌いです」

紅花の言葉に圧倒され、言葉が出ないでいると、紅花は畳みかけるように言葉を繋いだ。

「その通りです。私は中洲のバーラウンジで働いています。でもそこは超高級クラブで、財界でも有名な人しか来ないナンバーワンクラブなんですよ。誰それとアルバイトできる所ではないんです。美貌もそうですが、ハイレベルな教養がないと務まらない所なんです。私はその仕事のために、毎日四つの新聞を読み込んでいるんですよ。一流のお客様の話についていかないといけないから。私は有名大

学にも合格しなければならないから、勉強の時間も必要なんです。そのラウンジの時給はめちゃ高額なんです。時間に限りがある私にとって、学費を稼がねばならないし、勉強もしなければならない。だからこのアルバイトなんです。私の人生がかかっているんです。先生にはこの気持ちなんか分からないでしょう？」

私はやっと言葉を出した。

「紅花さんの気持ちが分かる分からないではなく、私が伝えなければならないことは、ルールには沿わねばならない、ということです。残念ながら、バーラウンジは留学生のアルバイト先には該当しません」

と私が言うと、紅花は更に言葉を続けた。

「では、先生に妹がいて、私と同じ状況だとしたら先生はどう言いますか？　自分で学費を稼ぐという妹に辞めろと言いますか？　そもそも日本人だと時間制限がなくどこでもアルバイトできるのに、何故留学生だとできないのか、意味が分からない！」と、紅花が声を荒らげる。

「それがルールだからです。日本人の学生だって、アメリカに留学すれば、アルバイトはできません。その国に行けばその国のルールがあります。紅花さんは日本留学をしているのだから、日本のルールに従わなければなりません」

私がそう言うと、紅花は完全に開き直った。

「では、『はい、分かりました』と言えば良いですか？　先生は、私のアルバイト先まで来て、私をひきずり下ろしますか？　先生から注意を受け私は『改めます』と答えたことにしておいてください。それでいいですか？」と言うなり荒々しくバッグを引き寄せ、面談室を出て行ってしまった。

紅花は、「辞めます」とは言わなかった。「そういうことにしておいて」と言った。本来であれば追いかけてでもアルバイトを辞めさせるよう説得しなければならない。しかし、私はここまで流暢に反論できる紅花の日本語力に感心していた。毎日、四紙もの新聞を読み込む日本人学生がどれだけいるだろうか。紅花がしていることはそんなに悪いことなのだろうか、とさえ思う。それでも、「先生の話し方、大嫌いです」と言われた一言は、さすがに胸に刺さった。

「おい。ちゃんと聞いてる？」

恋人の坂本陸がテーブルを二度叩いた。

「あ、ごめん。考え事してた」

久しぶりのデートなのに私がうわの空なので、陸はふてくされ気味である。そういえば、この人気イタリアンレストランを予約するのにどれだけ大変だったかを陸は連発していた。前菜のアンティパストを食べながら、陸は更にこ

う言った。
「なんか、分かんないけどさあ、犯罪犯すベトナム人や我儘な中国人なんてほっとけば。大体さ、そこまでしなきゃならないなんて、日本語教師って、割りが合わないじゃねえの？」
「ベトナム人とか中国人とか言わないでくれる？　ベトナムからの留学生、中国からの留学生って言って。陸だって、外国で『おい、日本人』ってひと括りにされたら嫌でしょう？」と、私は切り返す。
「お前さ、変なとこ、こだわるよな。どーでもいいじゃん。そんなこと」
「よくないよ。それに、割りが合うとか合わないとか、そういう言い方も辞めて。私だって日本語教師という職業にプライド持ってやってるんだから」
「はいはい。分かりましたよ。せっかく久しぶりに会ったんだから、喧嘩は辞めようぜ」
「そうだね。ごめん。私も言い過ぎた」
「まぁ、いいさ。それより、そろそろ日にち決めて両親に挨拶しようぜ。お互い、もう三十三にもなるし、俺はまだいいけど、お前はアウトだぜ。てか、お前の方からお願いされるのがスジってもんだけどな」
「……なんか、仕事が一杯一杯で、なかなか気持ちが進まないんだよね」
「なんだよ、それ。俺の方があせってるように聞こえるじゃん。お前、結婚したくねえのかよ」
「そういうわけじゃないけど……」
「ま、俺は寛大だから、結婚してもお前が仕事続けることは許してやるからさ」
そう言いながら、陸はワインを飲み干した。
私は、「仕事を続けることを許してやる」と言った陸の言葉が、いつまでも頭から離れなかった。果たして女性の仕事とは、男性に許してもらわなければならないものなのだろうか？　私は許してもらってまで結婚がしたいのだろうか？　自分の中で、言い知れない不安や不満が渦を巻く。
恋人、坂本陸とは、二年前の夏に開催された中学校の同窓会で再会した。中学時代、野球部のピッチャーで、文化祭ではギターも弾けるという陸は、ちょっとしたアイドルだった。他の女子生徒もそうしたように、私も陸に淡い恋心を抱き、バレンタインにチョコと手紙を渡した口だ。陸は高校でも大学でも野球漬けで、就職は野球で有名な実業団に入ったものの、ケガをして帰省し、その後は地元の中堅企業でサラリーマンをしている。私も、大学の英文科を卒業し、念願の海外留学も果たしたが、思うような就職に就くことができず、それならば、と外国籍の学生に日本語

を教える教師となった。最初の頃は無我夢中で仕事に取り組んだが、仕事にも慣れ、少し余裕ができた二年前の同窓会で陸と再会し、付き合うようになった。

付き合い当初の頃は、あこがれだった陸のリーダーシップも心地よかったのだが、この頃は、陸の、上から目線の発言がひっかかるようになっていた。陸は私の雰囲気が好きだという。一緒に居て心地よいとも。果たしてそれは、私が肝心なことを言わない、優柔不断さの由縁ではなかろうか、と、ふと思う。王紅花が言った、「先生は優しい言葉を言えば、うまくいく、と思っているでしょう?」という言葉が頭をよぎる。私は陸に対し、仕事に関しては思ったことを言えるのだが、恋愛や結婚に対する本音が言えないでいた。それは裏返すと、結婚適齢期をすでに越えている女の弱みでもあったかも知れない。それと同時に、私には自分の結婚に対する信念のようなものが欠落しているのではないか、とも感じていた。

数日して、理事長から呼ばれた。

今年で五十歳になる井上大理事長は、民間企業出の敏腕経営者でもある。大学時代、バックパッカーとしてアジアを廻っていた経験から、日本語学校を経営するに至ったと聞いている。日本語学校とは、文科省に所属はなく、法務省管轄のいわば外国人の進学塾のようなものだ。一般企業でも要件を満たせば日本語学校を設立することができる。しかし、入学者数の鍵を握る留学ビザは、外国事情や入国管理局のさじ加減で左右されることもあり、学校経営としてはなかなか難しいものがある。そういった状況の中でも、留学生数三百名を超える中堅どころの福岡国際日本語学校は、地元で、そこそこの評価を受けていた。

理事長は、私を労いながら声をかけてくれた

「裁判、お疲れ様でした。わざわざ群馬県までご苦労様でした。結局、家族がらみの犯罪だったみたいですね」

「はい。祖父からの指示だったようです。群馬の悪い組織とチャムの祖父はすでにネットワークがあり、親戚縁者を留学ビザで入国させては、そこの組織に行くよう、指示していたとのことでした」

「早速、ベトナムの業者には通達をしましたよ。今回は、業者も騙されたわけですから、怒り心頭でした。今後、その家族はマークされることになるでしょう。それが分かっただけでも収穫です。それと、嘆願書の件ですが、私も廻りに聞いてみたりしたのですが、参考になる案件が見当たりません。退学にした留学生のことは放っておけばよい、と言う他校の経営者もいましたが、やはり、当校は学校ですから、嘆願書は出した方が良い、と思うのですが、どう

でしょう?」
「そうですね。私も詳しいことは分からなかったのですが、弁護士側は、出して当たり前、といったような書類の渡し方でした。理事長がそのような判断をして頂けるのであれば、早速、理事長印を押したものを明日、弁護士事務所に送っておきます」
「嘆願書が出ると、罪が軽くなるとのことですが、どういった処分になるのでしょうね?」
「私もよくは分かりませんが、森田刑事から、大麻に関する処罰は厳しいと聞きました。刑期は分かりませんが、少なくとも強制送還にはなると思います」
「もう問題は学校から離れているとは思いますが、くれぐれも失踪扱いにだけはならないようにしてくださいね」
理事長が心配な部分はよく分かる。入管法に明記されている、適正校取り消しになるパーセントのことである。一人の留学生を失踪させてしまうことは、学校にとっては大問題なのだ。私は心してこう答えた。
「それはないと思います。チャムはすでに拘束されているわけですから、失踪になることはありません」。そう答えたのだが、後日、私は、その答えを大いに悔やむことになる。
理事長室から出ると、廊下で紅花とすれ違う。私を見ると、紅花は、つんと横を向いた。私は紅花を呼び止めて、バーラウンジのアルバイトを辞めたかどうか、確認しなければと思ったが、スタスタと歩いていく紅花をそのまま見送った。自分の中で、「一応、注意はしたのだから」と、言い訳が持ち上がる。いや紅花が私を無視した時点で状況は分かっているのに、私は事実確認をすることを避けた。

週末、私は坂本家のリビングに来ていた。陸の実家である。私たちが通った中学校から、いくらも離れていない住宅地である。私の家もかつてはこの校区にあったのだが、父親が癌で亡くなってからは母親の実家に引っ越したので、この土地からは遠ざかっている。
「まあまあ、やはり地元の娘さんが一番ね、陸ちゃん」
陸の母親が上機嫌に話している。「三十三歳の息子にちゃん付け? 地元以外の娘さんも来たってこと?」と内心、疑問符で一杯になりながらも、笑顔で応対する。
「こいつ、中学の頃、俺にぞっこんだったんだぜ」と、陸ちゃんが母親に自慢するかの如く言葉を返す。
派手目に化粧した母親の横で、にこりともしない仏頂面の父親がたばこをふかしている。
三つ年下の妹がいるはずだが、この日は出かけているようだ。

何となく、この家庭の空気は乾いてる、そんな印象を私は感じた。
「で、あかりさんのご家族は？」と、母親が私を探る。
「はい、母と祖母と妹がいます。父は五年前に癌で亡くなりました」
「そう、それはお気の毒に。でも、これからは陸ちゃんがいるから、大丈夫ですよ」
何が大丈夫なのかな？ と思いつつも、私は笑みを絶やさないでいた。
しばらく雑談が続いたのだが、母親が私にこう問いかけた。
「あかりさん、りんごはお好き？ りんごがあるんだけど、食べる？」
私はとまどいながらも、どう答えたらいいものか、一瞬迷った。そして、「はい。果物は何でも好きです」と答えた。
「そう。では、剝こうかしら。嫌いな人もいるから、聞かないとね」、そう言いながら、陸の母親は台所に向かった。手土産にケーキを持ってきたのだが、それは冷蔵庫に入れられたままである。
しばらくして、一個のりんごを八等分したものが、三つの小皿に分けられてテーブルの上に置かれた。陸の皿に三つ、母親の皿に三つ、私の皿には二つのりんごが盛られている。父親の前には置かれていない。
「はい、どうぞ。あ、いいのよ、気にしないで。主人はりんご嫌いだから」
父親は、その言葉を聞くやいなや、テーブルを離れ、テレビ前のソファに移動した。
テーブルの上にはすでに空になったコーヒーカップがそのままになっている。私は、小皿に盛られた二つのりんごをしばらく眺めていた。

初めての恋人宅訪問は酷く疲れた。
家に帰って、ベッドに寝転んだ私は、妙にりんごのことが頭から離れなかった。
「彼氏の家族はどうだった？」という声と共に、母親が部屋に入ってきた。
私はベッドから起き上がって母親に尋ねた。
「ねえ、お母さん、ここにりんごが一個あります。八等分しました。家族が三人、一人はりんごが嫌いです。で、客が一人、りんごはどう分ける？」
「何？ それ。変な質問ね」と、母親はベッドの脇に腰かける。
「手土産にケーキ持って行ったのね。でも、それは冷蔵庫に入れたままで、りんごは好きかって、陸の母親が尋ね

るの。で、好きだと答えると、一個のりんごが八等分されて出てきたわけ。そのりんごは小皿に盛られて、陸には三個、母親も三個、私は二個だったのよ。父親はりんごが嫌いなんだって。普通さ、お客には三個じゃない？　そもそもお持たせって、出すものではないのかな？　お母さんもお祖母ちゃんも我が家に客が来たら、お菓子でも果物でも大皿にどんと盛るじゃない？　お好きだったらどうぞって。客に好きか嫌いか、なんて聞かないよね？」

「ふーん、そうだったの。そうねえ。お持たせって、顔なじみだったらサンキューって貰えるけど、せっかく息子の彼女が最初に持ってきてくれたケーキだから、出すことを遠慮したのかもしれないわよ。それに、りんごだって、向こうのお母様も緊張してらっしゃっただけかも知れないわよ。そう深く考えないでもいいんじゃない？　あかりは、妙に小さなこと、こだわるからねえ」

「そうかなあ。私がおかしいのかな。なんか、その一個の差で線を引かれた気がしたのよね」

「そもそもね、あかりは彼氏のこと好きなの？　結婚したいと真剣に思ってるの？」

「まあね、年も年だし。結婚できればしたいな、と思っているよ。お母さんだって、早く私を嫁に出して安心したいでしょう？」

「できればしたいな、っていうくらいなら辞めなさい。本当に好きな人の家でのことだったら、りんごの個数なんか気にしないってお母さんは思うよ。それに結婚はあかりの問題であって、お母さんを安心させたいから、なんて言葉は使ってほしくないな。あかりは、どこか都合が悪くなると逃げるようなところがあるからね。そんな気持ちだと、陸さんにも失礼だよ」

母親の鋭い指摘に言葉が出ない。黙っていると、母親が言葉を繋いだ。

「ねえ、あかり。お母さんね、『釣りバカ日誌』に出てくるハマちゃんのプロポーズの言葉が大好きなの。ハマちゃんが、みち子さんの父親に結婚を申し込む時、『ぼくと結婚して、みち子さんを幸せにできるかどうかは分かりませんが、ぼくはみち子さんと結婚したら幸せになります！』って言うのね。正直でストレートな気持ちが最高じゃない？　お母さん、あかりには、ハマちゃんのような人と結婚してほしいな」

「何？　それ。結局、娘に結婚してほしいってことじゃん」と、私は話の流れをすり替えた。そして、確かに私には、相手のことを純粋に思うストレートさは持ち合わせていない、と思った。それは陸に対して持ち合わせていないのか、そもそも自分にはそういう感情がないのかよく分か

らなかった。

嘆願書を送って二週間を過ぎた頃、飯島弁護士から連絡があった。私が出ると、例のハキハキした口調で挨拶もなく、こう切り出された。

「嘆願書が功を奏しました。チャム君は強制送還から自主帰国になりました。つきましては、御校にその後をお任せしたいと思いますので、お迎えをお願い致します」

「え？　それはどういうことですか？　自主帰国ってどういうことですか？」

私は驚いて、そう質問した。

「だから、つまり、嘆願書を出された学校を信用し、お任せしますということです」

「釈放ということでしょうか？」

「そうです。しかし、学校は退学になっているわけですから、資格外活動はできません。なので、御校で自主帰国させてください」

「待ってください。それは検察機関で為されることではないのですか？」

「だから、何度も申しています。嘆願書の効果で釈放になり、自主帰国になったと。裁判所からチャム君を受け取り、新幹線に乗せるまではこちらでやりますので、その後はそちらの学校でお願いします。時間等はメールでお知らせしますので」と言い切り、電話を切られた。

私はあっけにとられた。何のための嘆願書か、と思う。これはひとえに国選弁護人が自分の功績を挙げる手段として使ったのではなかろうか、という疑問が残る。それが証拠に、嘆願書によってどういう結末になるかという説明は一切受けていない。自主帰国は学校にとって朗報とはとても言いがたい。本人にとっては、失踪するチャンスが残るからである。私はすぐに理事長室に向かった。

理事長は私の報告を聞き、一呼吸してから、こう言った。

「結局、嘆願書によってチャムは釈放され、強制送還されるところが自主帰国になったというわけですか。これをどう捉えるべきですかね」

「すみません。私がもう少し詳細を弁護士から聞いておけばよかったのですが……」

思えば、そういった詳細の説明をしたくないがために、飯島弁護士は書類だけ渡し、踵を返したのではなかったのか、そういう疑問が持ち上がる。理事長はそのことを察するように、言葉をかけてくれた。

「ある意味、これは弁護士の作戦だったのかも知れませんね。相良先生にその後を示唆していなかったことが物語っているようです。仕方ありません。留学ビザを出した

のはうちですから、これも、学校の責任といえば、その通りかも知れません。では、新幹線の切符の手配をして、次の日のベトナム便のチケットを予約し、帰国させる準備をしてください。くれぐれも失踪だけはさせないよう、万全を期してください」

「はい、分かりました」と、私は答えたものの、これからのことを考えると不安ばかりが持ち上がる。

入管から出された留学ビザは、よっぽどのことがない限り取り消されることはない。出席率が悪く、学則を守らない留学生を退学処分にし、学校が帰国をさせようとするも、応じない学生も居る。ビザの期限がある限りは日本に滞在することが許されているからだ。失踪されては困るからと、退学になった学生を縛り上げ、無理やり帰国の飛行機に乗せるということは、日本語学校機関ではできない。あくまでも説得し納得させた上での帰国にしなければならないのである。

いつぞやは、日本に来て素行が悪くなった留学生を帰国させようとしたが、帰りたくない留学生は、空港で着ているものをすべて脱いでしまった。下着さえも。警察が来て、一旦留置場に留め置かれる。学校職員が、「この学生は問題があるので帰国予定です。協力してください」と言うも、警察は取り合ってくれず、次の日の朝、釈放されたとたん失踪してしまった。釈放の連絡を頼んでいたにもかかわらず、学校に連絡はなかった。

学校は懸命に対応したのに、失踪パーセントだけがつく。入管側は、「そもそも問題がない学生を連れて来る約束です。問題があったら、学校で対応しなさい」という姿勢なので、留学ビザを取り消してくれることはない。教育をやっている限り、全ての留学生が優秀であるはずもないし、全く問題が起らないことなどあり得ない。九十七人に問題がなくても、三人に問題があれば、適正校を取り消されるのが日本語学校だ。通常の学校であれば退学処分で終わるのだが、日本語学校では、退学になった留学生でも行方を追わねばならない義務がここにある。

その日は放課後、地元の警察署に立ち寄った。

警備部警備課の森田刑事は、留学生問題に何かと相談にのってくれる面倒見のよい刑事だ。裁判を傍聴するように進めてくれたのも、森田刑事である。群馬での裁判のことは、すでに電話報告していたのだが、その後の報告を含め、直接会って話をしようと思ったのだ。実直で、大らかな森田刑事からは、いつも元気をもらうことができる。

「よっ！　相良先生、久しぶり！　群馬裁判のその後はどう？」